

「需要乗数」と「供給乗数」

ー 二種の開放経済理論 ー

<要約>

小 島 清

ケインズとハロッドが1930年代後半に着想した「投資・輸出乗数」は有名であるが、その性格は「需要乗数」である。投資と輸出（つまり外国の需要）という有効需要が創出されると、その乗数倍の国民所得が増産されることになる。乗数は $1/(1-c)$ であって、限界消費性向 c に従って、有効需要＝生産所得が次つぎに波及的に増加することを、フォーミュレートしている。

これに対し、故赤松要教授とストルパー教授が、それぞれ独立に、1950年に、日本とイタリーの戦後の荒廃経済の実情に立脚して、「供給乗数」を提唱した。それは、輸入中間財（綿花、鉄鉱石、石油など）が入手できさえすれば、残存工場が稼働し、次つぎに付加価値（労働）が加えられて、 $1/(1-v)$ （ただし v =限界付加価値率）なる乗数倍の製品(=GNP)を生産できるようになるというのである。

供給乗数のフォーミュレーションにはなお困難が残り、未完成である。供給側アプローチの中心問題たる「中間財貿易モデル」を、補論において、検討しておいた。

需要乗数と供給乗数は、開放経済体系を分析するのに、需要側アプローチと供給側アプローチの二種が存在することを代表するものであり、今後の国際経済学の研究に大きな示唆を与えていることになる。